

## 13

## 老官山漢墓出土『六十病方』の知見

真柳 誠

茨城大学

2012年7月、中国四川省成都市老官山の前漢3号墓(前188~前87埋葬)から出土した医書群の一つに、『六十病方』がある。近年ようやく本書の研究報告が中国で相つぎ、全文の初歩的積文も2016年夏に公開された。については現在までの知見を整理しておきたい。

本書は1本1行の竹簡で、数片に破断した簡もあって計182片からなる。目録として1本に4病を記入した題名簡15本があり、他の病方簡を治風痺汗出方1~治泄而煩心60までほぼ正当に配列することができた。全体は約9000字で、薬名約200・病症100弱・医方70以上が記述されていた。筆写年代は文中にある麇丘(陝西)と済北・都昌(山東)の地名が使用された時期からして、前221~前194の間と推測されている。同墓出土の耳杯に朱書された墓主の弓氏は、祖先が魯国(山東南部と江蘇北部)からの移民だったらしい。

本書の3方では出典に公孫方・都昌跳青方・息生方方を条末に記し、類例は甘肅省出土の『武威漢代医簡』(西暦50前後)に公孫君方が出典とある。『史記』の伝によると、斉(山東)の倉公は前180から同郷の陽慶に黄帝・扁鵲の医書を学び、その以前は同郷の公孫光にも医方を学んでいた。すると山東の公孫方・都昌跳青方は前200前後に四川まで、公孫君方は西暦50前後に甘肅まで伝播していた。山東では西暦130頃の扁鵲らしき針医画像石が8点ほど出土し、老官山からは『徹昔(扁鵲)診法』も出土している。

題名簡の病症配列1~60に規則性はみえないが、全体では臨床の各科にわたっていた。病症には風痺・風聾・風汗・風熱中・風偏清・風痺・内風などがあり、明らかに風を病因として認知している。気の異常を意識した上気・下気、傷字による傷飲・傷寒・傷肺・傷中の表現、瘕・山・内崩・癰・鮮・間・蹶・温病・消渴・癰などの病名も注目された。

病方簡は多くが1病症に1医方だが、一部には複数の医方がある。剤型は治・春・屑・合(散)35方、汁(湯)19方、完(丸)14方などがあり、当順次と剤型名・処方名がなくて「禹歩」治法がある点は、前221~前207頃筆写の馬王堆出土『五十二病方』と同傾向だった。ただし本書の大多数は内服で、剤型が多様で外用の多い『五十二』と異なる。

処方薬数を「凡幾物」、方寸匕・刀圭で散剤を計量して酒服、「父且(咬咀)」した薬物を煮・炊・沸・煎して「適寒温」で使用、服薬後の飲食に禁忌を指示するのは『武威』と同様だった。これらの大多数は西暦230頃の張仲景医方にも踏襲されている。少なからぬ条末に「衰益、以知毒為齊」や「已試」などがあるのは、経験の蓄積を意味しよう。

治温病39の服薬後に「厚衣臥汗出」、治風痺初発56に「飲汁臥汗出」とあり、どうも発汗が治癒機転であるのに気づいている。しかし発汗薬を配剤する他の処方に汗の記述はなく、治法としての発汗はまだ強調されていない。瀉下法も開発段階だったらしい。飲消石27で溶液服用後の排泄回数などを記すが、瀉下薬の大戟・芫華を配剤する治傷飲33に泄下などの記述はない。大黃がある治心腹43も同様だった。

風を病因とする医方には発汗作用のある圭・薑・細辛・烏喙などが多く配剤され、『武威』や仲景に先行していた。主に湯剤に酒・粥・飴・棗が配剤されるのは仲景医方に通じ、全体の用薬傾向も類似する。しかし甘草配剤は1方だけで、麻黄・黄耆・人參・牡丹皮はみえない。病症と配剤薬の関係では、西暦5頃の『神農本草経』の薬物主治と合致する例が相当にある。治大伏…42では心腹痛の所在を臟腑などでいい、「丹漫主匈、莎漫主腹、苦漫主脅、玄漫主腸、苳漫主心、勺業主少腹」とあるのも本草記述方式の先駆だった。

本書の出現により、『五十二病方』→『六十病方』→『史記』倉公伝→『漢書』芸文志「経方」→『神農本草経』→『武威漢代医簡』→張仲景医方の変遷がかなり明瞭になった。